福岡県立大学心理臨床研究，12巻，2020，39-45　　［事例報告］

未就学の定型発達児を持つ母親に対するビデオフィードバックを用いたペアレントトレーニング

柳　谷　　学*

要旨

本研究は、食事中に立ち歩く女児を持つ母親に対してビデオフィードバックを用いたペアレントトレーニングを実施した事例から、母親や女児の行動変容が見られた経過やビデオフィードバックの有用性について考察した。従来のペアレントトレーニングのような記録や宿題の取り組みと比べ、ビデオフィードバックは、機材さえ準備が可能であれば簡単に行うことができ、クライエントの負担軽減に繋がる。セラピストとしても、ビデオの映像を受け取ることで、課題場面の様子を何度もチェックすることができ、母親とともにその場面を振り返ることで、母親のどの行動がよいかを直接的にフィードバックすることができるといった有用性があるといえる。また、本事例によって、定型発達児を持つ親に対しても、ビデオフィードバックを用いたペアレントトレーニングの効果も示唆された。

キーワード：ペアレントトレーニング　ビデオフィードバック　育児

１．問題と目的

昨今は地域におけるつながりの希薄化、核家族化により、子育て家庭は孤立感を深め、子育てに関する不安や負担を抱えやすくなっている（厚生労働白書、2015）。内閣府の「結婚・家族形成に関する意識調査」（2014）でも、全体の40.7％が「きちんとした子供に育てられるか自信がない」と回答している。

このように子育てに自信がないと答えた人たちはどのような支援を求めているのであろうか。内閣府の「家族と地域における子育てに関する意識調査」(2013) によれば、子育てする人にとっては90.9％が地域の支えが重要であると回答している。そのうち、「子育てに関する悩みについて気軽に相談できる人や場があること」が58.1％、「子育てをする親同士で話しができる仲間づくりの場があること」が54.5％、「子育てに関する情報を提供する人や場があること」が45.1％の割合でそれぞれ重要であると回答し、約半数が地域での子育てに関する相談場所や交流の場を重視している。

子育てを支援する取り組みの一つとしてペアレントトレーニング（以下、PTと略）が挙げられる。PTとは、行動療法の理論や技術、学習の考え方をもとに（山上、1998）、子どもの行動を親が観察・記録し、そこから得られたデータに基づいてさまざまな情報を提供し、それを自宅で試してもらうことで親の困り感を減らす取り組みである（福田、2011）。我が国も平成26年度の障害児支援の在り方に関する検討会において、「障害児を育てる家族に対して、発達の各段階に応じて障害児の「育ち」や「暮らし」を安定させることを基本に置いて丁寧な支援を行うことにより、当該障害児自身にも良い影響を与えることが期待される」としてPTを取り上げている（厚生労働省、2014）。また、近年では障害児のみならず、定型発達児の子を持つ母親への取り組みも実施されており、子供の養育に対するスキルを向上させるといった一定の成果が報告されている（堤、2008）。

前述のようにPTでは、子どもの行動を親が観察・記録し、そのデータを元に家庭での取り組み方法を考えていくという手法が多く見られる（例えば、堤、2008；

* 東近江市発達支援センター　心理判定員

福田、2011)。また、近年ではビデオカメラなどを用いて、家庭における課題場面の動画撮影を行い、その動画データを元に、PTを進めていく手法を取る事例もいくつか見られている（上野・野呂、2010；上野・高浜・野呂、2012；神山、2017)。ビデオカメラを用いて親自身に特定場面の観察を依頼することは、行動変容に関する現実的な測定方法であり、ビデオの提出は従来のPTにおける報告の機能をもち、宿題や記録の提出に代替するものとして考えられる（上野・野呂、2010)。また、上野ら（2012）は、「親が自身の行動をビデオの映像を通して視聴することで、自身の行動を客観的に観察、記録することができ、次の標的場面で適切な行動が想起しやすくなると考えられる。また、これまでのペアレントトレーニングに関する研究においては、親の適切な養育行動の維持、般化に効果があるという結果が導き出されているが、どれも指導者が直接観察していたり、トレーニング場面から家庭場面への般化を想定していない。家庭の様子をビデオ撮影することによって、指導者が親子の行動を観察・評価することができると考えられる」と述べている。このように、特定場面を撮影したビデオを親自身や支援者が視聴して評価するなど、ビデオを活用して積極的な介入を行う手法はビデオフィードバックと呼ばれる。Reamer, Brady, and Hawkins（1998）は、自閉スペクトラム症の診断を受けた、発達に遅れのある子の母親に対して、適切な養育行動を促進させるためにビデオフィードバックを実施し、その有効性を示唆している。

本事例は、前述のようにビデオカメラを用いて、親自身に特定場面の撮影を依頼し、その映像を共有する手続きを取り入れたPTの実践例である。本事例をもとに、PT実践でのビデオフィードバックの有用性を考えていくこととする。

２．事例の概要（初回面接からの情報、年齢は来談時）

クライエント：30代後半の母親A。３歳の女児B、１歳７ヶ月の女児Cと４ヶ月の男児Dを持つ。

主訴：「Bが食事中にうろうろせず、少なくとも、自分が食べる分は集中して食べられるようになってほしい」

家族背景：40代前半の夫、B、C、DとAの５人世帯である。夫の両親、義妹と敷地内同居をしている。B、C、Dいずれも保育園や幼稚園などには通園しておらず、市の親子サロンに通っている程度である。夫や夫の両親らは勤務のため、子どもたちの世話は基本的にA一人で行っている。

問題歴：Bの妊娠経過は特に異常はなかったが、35週に切迫早産で入院となり、36週４日で破水、出産する。2144gで２週ほど保育器に入っていたが、2500gを超え、３週目で帰宅となる。４ヶ月、８ヶ月、１歳半健診でいずれも体重が低く、再検査となっているが、運動面や言語面などの発達に問題はなく、３歳児健診でも、体重は低いものの、成長曲線にはぎりぎり沿っているため、特に再検査になるようなことはない。

A曰く、食べ始めから６割程は座っていられるが、残りの４割程で立ち上がったり、椅子のまま動いたり、寝転んだりすることが多い。親子サロンでもご飯を食べる機会があるが、半分ほど食べ終えると、BとCとで走り回ったり、他の子と遊び出したりしてしまう。「もういらないなら片付けるよ」と声かけをすると、「いる！」と言い、食べにくる。準備している分の５割は食べてくれるが、その時の気分で何を食べるかが分からないので、どれか食べてくれたらいいなという思いで、そもそも量は多めに準備しているとのことである。夕食時も、魚と肉、両方のおかずを準備しているようである。初回面接前に、家庭での食事の様子をビデオカメラにて撮影してもらうことを依頼し、初回面接にてAとともにその映像を確認した。AがDをおんぶしながら、Cの相手を、夫がBの相手をしながら食事している様子であった。夫は６時過ぎに帰宅し、夕食は家族全員で食べることが殆どで、各々の座席位置は図１の通りである。ビデオは図１の位置に、食卓に座る家族全員が映る距離と高さで設置した。Bの食事場面の様子を観察するため、夕食を食べ始める数分前から食べ終わるまでの約30分前後を録画した。

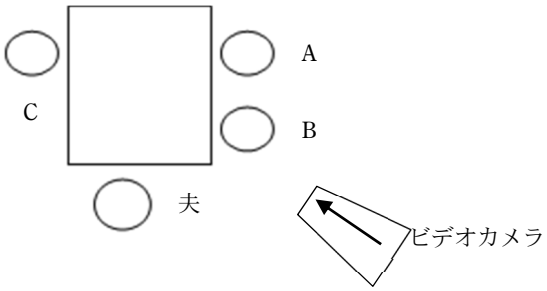

図１　初回面接時に確認した家族の座席位置とビデオカメラの配置場所

Bが椅子から立ち上がる時のパターンとして、①マヨネーズやふりかけなど何かものを取りに行く、②夫やAらに構いに行く、③遊び始める、の３点が見られた。

Aは、①に関してはそこまで気にしておらず、②についても甘えたいのであればまだ甘えさせておいてもいいのではないかと考えている。Dの出産の際にB、Cを連れてAの実家に帰った際に、ファミリーサポートセンター事業を利用したが、そのサポーターから食事の仕方について厳しく言われ、Bとしては恐い体験であったとAは感じている。そのため、Aとしては今のうちは甘えていてもいいかなと考えているとのことであった。

Aとしては、③を止められるようになってほしい様子である。Aが食べさせている時に、椅子を前後に動かす、立ち上がり、おもちゃの方へ向かう、寝転がって口を開けるなどする。「座らないと口に入れません」と言うとBが逃げていくので、「食べないのならごちそうさまする？」と言うと、戻って来て１口２口食べて食事が終了するとのことであった。

X年Y−２月、Aが通う親子サロンにおいて、筆者がPTの理論や手法を講義形式で情報提供するプログラム（柳谷、2018）を実施し、Aがそのプログラムに参加した。その際、筆者に上記の主訴について相談をし、プログラム終了後に筆者が当時所属していた大学の相談室にて、個別で心理面接を実施する流れとなった。

３．アセスメントと援助方針

Aは、Bの落ち着かない行動そのものというよりも、落ち着かないことでBが食事を取ってくれないことに対して苛立ちを感じているように思われた。どちらかを食べてくれたらいいと思って肉と魚両方のおかずを準備したり、量を多めに準備したりしていることや、低体重での出産、体重が低いために健診での再検査となっていることから、Bの発達に対する不安が背景にあると考えられた。

映像から、“AがCに食べさせている→Bが夫の膝に座りに行く→夫から構ってもらえたり、食べさせてもらえたりする”という流れが考えられた。また、夫がBにねだられ、夫の分のご飯を食べさせている様子もうかがえた。夫がいない際には欲しがることは全くないが、夫がいると、夫の分を食べたがるとのことであった。これらのことから、Bは椅子から立ち上がると、夫やAが構ってくれたり、食べさせてくれたりするので、立ち上がるという行動が強化されていると思われた。映像でのBの様子を見ていると、褒めてもらえたことは嬉しそうに自慢するなど、Aや夫の声かけはBにとって好子としてなり得ると思われたので、まずは、椅子に座ったら褒めてもらえる経験を重ね、椅子に座ることを定着させていけるように取り組んでいくこととした。

また、Aとしては少しでもBに食べてもらうために食事の量を多く準備しているが、食事の終わり頃にはBは満腹になっており、その結果、食べることの興味が薄れ、別のものに興味が向いている可能性も考えられた。食べさせるのはBの分のみにする、食事の量を調整するなども対応策の一つとして考えておく必要があると思われた。

４．面接の経過

大学院附属の心理相談室で、２週に１回１時間、対面法で実施した。面接前にビデオカメラにて撮影したデータを受け取り、面接と並行して、面接室に準備したノートパソコンに撮影データを移す作業を行った。前半に口頭にて振り返り、後半に撮影データを見ながらの振り返りを行った（以下、セラピストをThと略し、Aの発話は「　」、Thの発話は＜　＞、その他の発話は『　』で表記する）。

初回面接時に、生育歴や問題暦を確認した上で、Bが食事中にうろうろする様子の映像データをAと共に視聴した。そして＜まずは、座り続けられることを目標にすること＞と＜①Bが椅子から立ち上がって遊び出したりした時には、意図的に注目せず、「座って」と淡々と伝えること、②座ったら、褒めてあげるなど注目を増やすこと＞に取り組んでもらうことを伝えた。面接開始後の５週間（＃１～＃２）は、取り組みを継続する中で、「だいぶ座れるようになってきた」と話すものの、「ウロウロし出すなら、きちんとごちそうさまを言って、区切りを付けられるように」（＃１）、「Bは落ち着いてきたように感じるが、その分Cが動くようになった」（＃２）など、子どもの出来ていない部分に注目しやすいAの傾向が垣間見えた。また、「できれば量を十分食べてもらえればもっといい」「あまりにもウロウロするのでイライラして、食べ物を引いたことがあった」（＃１）や、「Cが１、２週間前から、食卓の横にぬいぐるみを置いておかないと食べないんです」（＃１）「ぬいぐるみを横に置いて、食べてくれるとかならまだ許せるんですけど、Cの場合、前に抱えながら、口をアーンと開けたりして。遊びながらなのがですね」（＃２）など、十分に食事に向き合ってくれないBやCへの苛立ちと戸惑いが多く見られた。

＃１では面接実施前に講義者と受講者の関係であった影響もあってか、＜旦那さんとAとで１対１で子どもたちに対応できるように座る位置をずらしてみるの

もいいかと思うんですが、どうでしょう？＞など、Thが提案をし、それをAが受け取るやり取りが多く、Cについての対応についても「ぬいぐるみはやめさせた方が良いんでしょうか」などThにアドバイスを求める姿が見られた。

＃２では、椅子のまま動くのも減り、子育てサロンでも、他の子に対してちゃんと座って食べるように注意するようにもなるなど、Bの行動の変化が見られた。また、座る位置を変更してみたことで、Bがウロウロすることや、BとCがお互いにちょっかいをかけること、夫の分を食べることも減った（図２）。

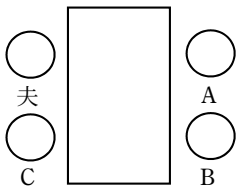

図２　＃２以降に変更した座席位置

そういった変化が少しずつ見られ、Aとしても「最終的に自分でごちそうさまは言えるようにはなって欲しいですけど、その内できるようになるかなーと。気にしてはいるけど、子育てサロンにきている他の子を見ても、そんなに出来てるわけじゃないし」と、見通しを立て、現状をあるがまま受け入れる発言も見られた。

また、Cのぬいぐるみの話を続ける中で、「やっぱりぬいぐるみを片付けた方が良いのかな」＜片付けた方が良いと思われます？＞「今そう思いました。ご飯食べるときはおもちゃ箱か何かに片付けて、隠して」＜なるほど。片付けることは事前にBとCには伝えますか？＞「伝えたほうが良いかなと思います。Bは隠したら『ない、なんで？なんで？』と聞いて来るでしょうし」と、自分からおもちゃを片付ける環境調整を行う方が望ましいだろうと考え、取り組みを広げていった。このように、回を重ねるにつれ、環境調整や内省をA自身が主体的に行う姿が見られていくこととなった。

＃３では初めに子育てサロンにて体重を量ってもらい、成長曲線の真ん中ほどまで伸びていたことを話された。環境調整によって、おもちゃなどを取りに行くことはなくなったが、今度はBとCとで一緒になって遊び出すことについて話が展開された。その中で、「一緒に遊んでるので、ごちそうさまする？と言うと、『まだ食べる』と言うので、一回片付けてみたんです。夫と一緒にごちそうさまと言ったら焦るかなと思ったんですけど、BもCも『ごちそうさま』と言って。片付けたら『まだいる』って言ってくるかと期待してたけど、そんなことはなく」と話された。“『まだいる』って言ってくるかと期待してた”という発言がAの抱えている問題の本質であると思い、＜まだ食べる、って言ってくれたり、もっと食べて欲しいっていう期待があったんですね＞と伝え返した。その上で、食べる量としてはいつもと同じくらい食べていたことを確認すると、「でも、これも私の欲なのかなとも思って。私が食べてもらいたいと思っているからっていうところはあるかなと。最近気付いたんですけど、私の怒りのスイッチは食事についてだと思って」「今、敷地内同居なんですけど、Cが生まれるまでは夫の両親と夫の妹と一緒に夕食を食べていたんです。その時は私が作ってたんですけど、味の好みが全然分からなくて。何も言われないんですよね、どんなのが好きかとか、辛い味付けが好みなのか甘いほうがいいのか。手探りで作って出すんですけど、残されたりとかして。でも、味が好みじゃなかったから残したのか、お腹いっぱいだから残したのかも分からないし、何もレスポンスがなくて。鳥と根菜の煮物を作った時に義妹が夫のお皿に何も言わずに鳥を分けてたのはけっこうショックで」と自己を振り返りながら、夫の家族との食事に関する経験について展開されていった。

その他、「以前、車で実家から帰ってくる時、Cはチャイルドシートを嫌がるんですけど、ちゃんと座れてるね、えらいねーと褒めてたら１時間座ってられたんですよ。前はじっとしてて、って言ってたんですけどやっぱり叱るのって効果ないんだって思いましたね」と話され、Cの行動に対しても母の対応が汎化されているようであった。

＃４には「目標達成できたのかなーと思います。もう少しできればいいなーと思うこともありますけど、最初と比べて良くなりましたし」「気になることとかは逐一注意してますね。最初に相談したころは何をどうしていいか分からないっていう状況だったんですけど、今はそういう状況ではないですね。大分悩みが軽減されました」と話された。映像データを見ながらの振り返りの際には、Bが椅子から転がり、カメラ外へ行くも、Aは反応せずにしており、戻ってきた時に「おかえり」と反応されていたため、＜ここ、戻ってこられた時に声を掛けられてていいですね＞とフィードバックを行った。このようにAの対応の変容も見えてきており、Bの行動の改善も見られた。＃５においても、「Bはもう動かなくなって。ごちそうさまするまで座っていることが何回か。前はおかわりする時とか、何か取りに行

く時とかも私についてきてたんですけど、ここ１週間はない気がします」とBの行動の改善が維持され、Aの認識としてもBの変化を感じている様子であった。そのため、＜＃４で、食事中のウロウロについては目標達成であるということと、ここで相談することも特にないとのことを言われていて。私の意見として、Mo.も振り返る力があるというか。今までこの相談室では私とお話する中で振り返っていく作業をしていたんですけど、それもご自身の中で振り返られているので＞と、Aの変化について伝え、終結として、１ヵ月半後にフォローアップを行うことを提案し、同意された。

＃６ではフォローアップとして、Bの現在の様子や取り組みの振り返りを行った。初めにBとCがしっかり食べるようになったとのことで、「嬉しいです。体格ちっちゃい方だったから」と語気を強め、嬉しそうにされる様子が見られた。

取り組みについては「最初は難しかったですね。居て！って言いたくなりました。実行する前に講義でお話を聞いてたのでこういうことかって思ったのは良かったですけど。知識としてはあってもいざってなると」「して欲しいことをしてくれた時にわざと注目するというか、それはしてますね。例えば、Cがお茶碗の一部を食べれてたら、ここが食べれたね！って。まだこれだけ残ってる！じゃなくて。ここが食べれたから、こっちも食べてみようかっていうと、嬉しいから全部食べるってなって。全部食べたら［食べた！］って言ってくれて。それでBも自分も一って食べてくれて。旦那にもそう言われたんですよ。［できてないところに注目するんじゃなくて、できてるところに注目したほうがやれる子だ］って」「嫌なことにあえて注意しないっていうのはするようになりましたね。あと、して欲しいことをしてくれたときに、してくれてありがとうって言うようになりました。中々意識しないとしないからですね」などを話された。

面接の最後に＃６の前日に撮影したビデオデータを共に見ていった。Bの様子について嬉しそうに話すAの姿が印象的であった。その後、初回面接時に見たビデオデータも共に振り返り、Bの様子の変化を共有し、面接を終結した。

５　考察

まず、本事例の経過について概括する。今回の主訴である“Bが食事中にうろうろする”行動は、AがCに対して食事を与えている状況に想起しやすいことがビデオ映像から予測された。つまり、“CはAに構ってもらえている”という弁別刺激があり、“構ってもらえていない”という状況の中で、“うろうろする”行動を取ることで、結果として“自分が構ってもらえる”という状況ということである（図３）。

そのため、“座り続けられること”を目標に設定し、“①Bが椅子から立ち上がって遊び出したりした時には、意図的に注目せず、「座って」と淡々と伝えること”で、“うろうろする”行動の弱化を試み、“②座ったら、褒めてあげるなど注目を増やすこと”で、“座る”とい

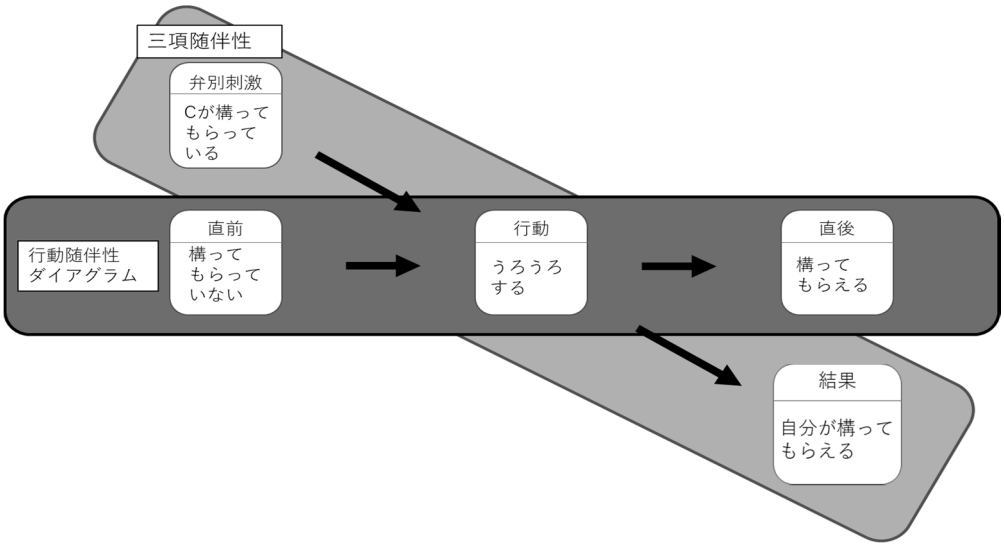

図３　食事中に、Bが“うろうろする”行動によって生じる環境の変化
（杉山・島宗・佐藤・Malott・Malott（1998）の図を元に作成）

う行動を強化することとした。また、面接の経過の中で、座る配置を変更することで立ち上がらなくても夫がBに関わりやすくしたり、A自身がおもちゃを片付けると決めたことで、おもちゃに気が散らなくなるといった環境調整もBの“座る”行動を定着させることに繋がったと考えられる。また、B自身が満腹に近づくことで、食事をする意欲も下がり、回避行動としての意味合いも“うろうろする”行動には含まれていると考えられたが、食事量について、Aの認知の変容が見受けられたため、食事量について取り組むことはしなかった。

前述のようにAは、低体重での出産、体重が低いために健診での再検査となっていることや、成長曲線に沿うように発達が見られた段階から自己を振り返る様子が見られたこと、体格が小さいことを気にされており、体重が増えたことを嬉しそうに話す様子などから、Bの発達に対する不安があったことが推測できる。そのため、食事をしっかり取ってもらいたい自身の思いに反する、“うろうろする”という行動に焦点が当たったのであろう。また、自身が作った食事に向き合わずに理由もわからないまま残すBやCの姿が、食事を残されたり拒否をされたりして無力感を体験した在りし日の夫の両親や義妹の姿と重なり、感情転移を引き起こしていたとも考えられる。そういった中で、ペアレントトレーニングにてAのBに関する対応方法への介入を通して、Bの行動変容が見られたことで、無力感から脱し、自己を振り返ることが出来るようになったと思われる。Aの家族状況としては、Bの他にCやDもおり、個々の発達に応じて臨機応変に対応していく必要があり、Aとしても＃４にて「大分悩みが軽減されました」と表現されているように、Bの状況の変化が見られたとしても、CやDなどの対応も併せて行うことが求められる。そのため、新たな子育ての不安は生じやすい環境にあると言える。しかし、「何をどうしていいか分からないっていう状況だったんですけど、今はそういう状況ではない」と併せて表現されているように、今回の取り組みはCやDの対応に活かすきっかけともなったことだろう。また、本事例は６セッションという短期間での終結となっている。それは、筆者が実施したプログラムに参加し、Bが事前にPTについての理論や知識をある程度備えていたこと、また、AとBとの母子関係が良好であり、褒めるなど注目を増やす対応が強化子として有効に働き、行動変容が短期間で見られ、Aのモチベーション維持に繋がったことなどが理由として推測される。

ビデオカメラでの撮影・共有は、本事例においても有益であったといえる。まず、上野ら（2010）が、従来のPTにおける宿題や記録の提出の代替であると述べている。今回の事例は３人の未就学児を抱える母親を対象としており、従来のような記録や宿題の取り組みは、Aにとっては負担が大きいことは容易に想像ができる。その点、ビデオカメラでの撮影は、機材さえ準備が可能であれば簡単に行うことができ、負担の軽減に繋がったと考えられる。また、ビデオの映像を受け取ることで、Thとしても食事場面の様子を何度もチェックすることができ、Aとともにビデオを見ながら食事場面を振り返ることで、＜ここで褒めているのはいいですね＞など、直接的にAのどの行動がよいかをフィードバックすることができる。これは、上野ら（2012）が「家庭の様子をビデオ撮影することによって、指導者が親子の行動を観察・評価することができると考えられる」と述べていることと合致する。

上野ら（2010）や神山（2017）、Reamer et al.（1998）など、ビデオフィードバックを活用したPTの実践研究はいくつか見られるが、いずれも自閉症スペクトラムの子や知的障害の子を持つ親を対象としている。本事例のBは健診などで体重の発達以外の発達面において特段指摘を受けておらず、現時点では定型発達であると考えられ、定型発達児を持つ親に対しても、ビデオフィードバックを用いたPTの効果が示された。

今後の課題については以下の二つである。第一に、今回の事例においては、PTに関する理論と技術について、事前に講義形式への参加という形で指導を受けている。そのため、前提として基礎的行動スキルの指導は事前に実施した上での面接となっている。上野ら（2010）は、ビデオフィードバックを用いたPTの実践研究の課題として、基礎的行動スキルを持っていない親に対してビデオフィードバックを適用していくために、基礎的な行動スキルに関するレクチャーを組み合わせていくこと、どの程度の知識やスキルを持っていることが前提となるのかを検討することが課題であると述べている。今回の事例では、上野ら（2010）が述べる課題についての示唆は得られていない。第二に、本事例はAの面接のみであり、他の定型発達児の子を持つ親にも同様の効果が見られるかは不明である。今後、PTをより実践的に活用していく上で、様々な事例での検討が必要となるだろう。

付　記

本研究を発表するにあたり快く承諾いただきましたAさん、スーパーバイザーとしてご指導いただきまし

た小山先生に心より感謝申し上げます。

文　献

福田 恭介（編）（2011）ペアレントトレーニング実践ガイドブック　きっとうまくいく。子どもの発達支援　あいり出版

神山　努（2017）特別支援学校（知的障害）における相互ビデオフィードバックを用いた全５回のペアレントトレーニングの効果　特殊教育学研究、55(3)、157-170

厚生労働省（2014）今後の障害児支援の在り方について（報告書）～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～
Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12201000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu-Kikakuka/0000051490.pdf

厚生労働省（2015）平成27年厚生労働白書
Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/dl/all.pdf

内閣府（2014）平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」報告書
Retrieved from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/pdf/print.pdf

内閣府（2013）平成25年度「家族と地域における子育てに関する意識調査」報告書
Retrieved from https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h25/ishiki/pdf/2-3.pdf

Reamer, R.B., Brady, M.P., & Hawkins, J. (1998) The Effects of Video Self-Modeling on Parents' Interactions with Children with Developmental Disabilities. *Education and Training in Mental Retardatioin and Deveropmental Disabilities*, 33, 131-143

杉山 尚子・島宗 理・佐藤 方哉・Malott, R.W. & Malott, M.E.（1998）行動分析学入門　産業図書

堤 俊彦（2008）ペアレントトレーニングを通した未就園児と母親の行動および養育態度の変容効果の検討　近畿医療福祉大学紀要、9(1)、99-106

上野 茜・野呂 文行（2010）自閉症障害児の親に対するペアレントトレーニングに関する研究―ビデオフィードバックが親の養育行動にもたらす効果の検討―　特殊教育学研究、48(2)、123-133

上野 茜・高浜 浩二・野呂 文行（2012）発達障害児の親に対する相互フィードバックを用いたペアレントトレーニングの検討　特殊教育学研究、50(3)、289-304

山上 敏子（監修）（1998）お母さんの学習室　発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム　二瓶社

柳谷 学（2018）ペアレントトレーニングによる情報提供が育児関連レジリエンス向上に及ぼす効果　福岡県立大学大学院人間社会学研究科修士論文（未公刊）